

■タイトル■

メキシコの看護教育における社会奉仕実習②

■著者■

群馬大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程

■リード■

メキシコにおける医師や看護師などの専門職教育では、卒業前の一定期間、「社会奉仕実習」として地域あるいは民間の施設で保健医療業務に従事することが義務づけられていることを、本誌第1巻10号でのべた。今回は、チアパス州で行われる社会奉仕実習の実際について紹介する。

■本文■

先住民の伝統医療を知る

チアパス州における社会奉仕実習は、先住民の間で行われている独特の医療に実習生たちがじかに触れることのできる貴重な機会ともなる。

実習生たちは、薬草や呪術、ホメオパシー（同種）を用いた伝統的治療師が行う治療や、産婆（伝統的助産師）が行う経験的な分娩介助の方法などを、現地に行って初めて見聞きする。

メキシコ政府は、近代的医療サービスの全国的な普及に努めると同時に、このような伝統医療や民間療法を含む「補完代替医療（CAM；Complementary and Alternative Medicine）」の再評価に基づく伝統的治療師らの組織化と保護にも力を注いできた。

これらの補完代替医療については、大半の実習生が「先住民族の言語と同様に、首都圏では学ぶことのできない経験と技術を獲得する機会」とし、「首都圏を離れて社会奉仕実習を行う意義を、最も感じる瞬間の一つだ」と語っている。

薬草の処方や助産への介入

社会奉仕実習では 派遣された先の集落で、実習生が簡易保健室を運営し、来訪者への保健医療サービスを提供している。

発熱や下痢、腹痛などを訴えて訪れた先住民が薬草の処方を希望する場合には、実習生たちはマニュアルを参考に、その飲み方を指導する。また、ある実習生は産婆たちが運営する助産所に通い、衛生的な分娩環境の整備や出血などの異常分娩における具体的な対応を指導する。

このような活動を実施・継続していくためには、近代医療に基づく教育を受けてきた実習生に対する、地元の治療師らの理解と受け入れ、適宜の介入が欠かせない。

教育としての社会奉仕実習

しかし、彼らとの共通言語を持たない実習生が、現地の補完代替医療に対する関心だけを頼りに治療師らと協働することには限界がある。

実習生は、薬草の精製などを任されているうちに作業を放棄してしまったり、現地にあった栽培法を知らずに薬草を枯らしてしまうこともある。また、治療師らとの間に誤解が生じ、協働できなくなったケースもある。

このように、実習生は現地の代替医療に強い関心を持ち活動している。しかし、自分たちだけでそれを維持させたり、近代医療との接点を見出し発展させたりするまでには至っていない。

社会奉仕実習を通じた地域医療への貢献を果たすためには、実習生たちが試行錯誤を経るなかで偶発的に学び取るものに期待するだけでなく、彼らへのサポートが不可欠である。



薬草の精製作業